

南洲と蒼海

夜 久 正 雄

「南洲」は西郷隆盛のことである。鹿児島藩の生れの意味でかういふ号をつけたのであらう。「蒼海」は副島種臣のことである。佐賀藩の生れで海洋国家日本の夢をもつて号としたのであらう。いづれにも明治の夢がある。西郷隆盛のことは知らない人は知らないだらう。副島種臣のことは知つてゐる人の方が少いだらう。

副島蒼海は、早稲田大学を創つた大隈重信の先輩で、明治初年の外務卿（大臣）としてマリヤルーズ号事件を処理し、東洋のビスマルクとまで喧伝された明治時代の大政治家である。同時に漢詩と書とにすぐれ、当時東洋一の詩人書家と目されて、中国の文人政治家の尊敬を集めてゐた。いまの政治家、学者、詩人、書家とは少しスケールがちがふやうである。スケールの大きさや思想や人柄の上で南洲に最も近かつたのではあるまいか。

蒼海の漢詩に「南洲」と題する次の詩がある。⁽¹⁾

国家多難、南洲を憶ふ。

北塞の風雲、終古の愁ひ。

李郭嘗て明す一王の義。

陳蕃定めて本朝の為に謀る。

憂ひを天上に遺す、君の志を悲しむ。

重きを人間に置く、若し儔を慕ふ。

拙子、如今、真に碌々。

徒に不死を為して但頭を搔く。

この詩のあとに、細字二行で次の文が書いてある。

「南洲未だ死せざる二日、岡部某を遣はして予に言ひて曰く、慎しみて死すること勿れと。此の事、今を距る二十一年。」

南洲の死は明治十年九月であるから、このあと書き通り正確にとれば、この詩は明治三十年の詩といふことになる。しかし、『蒼海全集』はこの詩のあとに「丙申中秋」の詩を置いてあるから、「丙申」すなはち明治二十九年の詩であらう。日清戦争直後、いはゆる三国干渉があつて、ロシアの強烈な圧力が加はつて来たのである。「北塞の風雲、終古の愁ひ」とはそれをさす。時に蒼海は対露問題で憂ひをともにした南洲を憶つたのである。

いづれにしる、右のあと書きは南洲の蒼海に対する遺言が「慎しみて死すること勿れ」といふ一語であつたことを

語つてゐる。これは容易ならぬ遺言である。しかもそれを死ぬ二日前——城山で南洲が死ぬ二日前——に、岡部某を使に出して告げたといふのである。南洲は特に岡部某に戦線を離脱させ、蒼海に「死ぬな」と伝言したのであらう。この一語に南洲の蒼海に寄せる万感がこもつてゐると思ふ。

明治三十一年に出版された『蒼海閑話』といふ本がある。蒼海の談話が主になつてゐる書物である。南洲との関係が次のやうに書いてある。「副島蒼海と西郷南洲」といふ題の文章で、「先生（蒼海）は西郷南洲と余程親密に交際なすつたと云ふ話でございますが、いつ頃御交際なさいましたか」といふ質問に対して、蒼海は次のやうに答へてゐる。

「初りは説の合ふこともあり、合はぬこともあつたぐらうがネ、あの人の死に至る時、拙者に遺言をされたで、死ぬ三日前に西郷に仕へて居つた、薩摩の岡部と云ふ者に、最早や自分は討死をするから出て行けと云ふて、夫れを出さるゝ時に、副島が支那から帰つて逢ふたならば、謹んで死するなかれと言はれた、其趣意を考へるに重もに荒いことを最早すると言はれたと見ゆるテ、それが最後の遺言であつた、其岡部と鈴木某と二人連れで遺言を通じた、是れは全く征韓の頃から外の朋友を離れ、拙者とは時々手紙の往復もし、それも人の往来位で、薩摩人の往来で、委托して物言ふたことも沢山ある、其頃から其遺言を拙者の為めに発するに至られたと見ゆるテ、凡そ役人と云ふ者はどんなの朋友でも、説の合ふ時と合はぬ時とあるものだ、其時は矢張争論をする、尤も征韓論までは拙者は大久保とが一番懇意にあつたやうにある、唯征韓の一条だけが、彼と見込の違つたと云ふもので、そこで役人の懇意は、或は討論、或は異論と云ふことは往々ある、ある度毎に見解の衝突は言ふまでもない話だ、

——詰り征韓論から一番親密にされたのでございますか——

先方も此方の役人には一寸朋友の種が切られたやうであり、拙者も辞職して居るものであるから、自然と相感した

と見えるテ、⁽²⁾

右の談話にある通り、明治十年の鹿児島鹿兒島の乱（西南の役）の時、蒼海は支那漫遊の旅に出てゐた。蒼海の当時の詩に「昔日欽差頭等の臣、今日単旅歴遊の身⁽³⁾」といふ句があつて、この時は正に「単旅歴遊の身」であつたが、旅行中に南洲の死を聞いたのではないかと思ふ。しかし南洲の死を悼んだ詩は当年の詩には見当らない。蒼海は一に支那人との交友、詩の往来に心を傾けてゐたやうである。南洲の死は聞いただらうが、それで帰国したとも見えない。

しかし、蒼海には支那に行く前の明治九年一月から六月までと思はれる歌稿と、明治十一年秋帰国してから十二年、十三年頃までの作と思はれる歌稿とが残つてゐる。これは『蒼海歌稿』といふ遺稿で、蒼海自筆の歌稿である。⁽⁴⁾その中に「南洲を祭る」の五首（實際は七首作られたはずであるが二首が切り取られてゐる）がある。

祭南洲

汝がためにはしる涙は民のため君の御ためを思ふすゑから

子供すら夜鳴ずありけり大君の醜の御楯と汝がなりし時

大君の右の腕ともたのまれし事もにくげのたねとしなるを

つみあるかはたつみなきか罪あるも汝が功はつぶさるべしや

（この間二首分切り取られてゐる）

一杯の水もてまつる此こころ汝は酌取て淡しとや見る

まじごころのこもつた、ほんとうにいい歌だと思ふ。しかも連作短歌になつてゐて、子規が見たら驚嘆しただらう。

杯りあはしてまゐる此こ、うしろの
くはしきを見る

お美あはるく大はは美なき、兜あるもめ
ハつぶさるるべしや

子供はうさうさ山也
糸も
ゆめめふえしる涙、民のあめ君の御
めを思ふあはるら
子供あはれ時受あはる大君の腕の
御指しあはる時
大君の右の腕ともまのまきしすもふくけ
りあはしきなるを

「祭南洲」『蒼海歌稿』

「はしる涙」と言ひ、「子供すら」と言ひ、「右の腕ともたのまれし」
「にくげのたね」と言ふ、みな口語的で直接的な言葉づかひで、語調
が強い。「つぶさるるべしや」も同じである。

第一首の「君」はいふまでもなく天皇さまの意で、明治天皇さまに
よせる南洲の忠誠心を疑ふものはない。

第二首目の「大君の醜の御楯」は、天皇股肱の軍人の意味であるが、
ここは具体的には南洲の任ぜられた「近衛都督、大将」を指したので
ある。

第三首目の「にくげ」は、『広辞苑』には「憎さうな様子」とある。
「にくさ」とあるところかと思ふが、誰の誰に対するにくさなのかち
よつとはつきりしない。西郷をして反逆にかり立てたものに対する蒼
海の憎しみといふのならば、直接には岩倉や大久保に対する敵意とも
とれるが、ちよつとよくわからない。

二首切り取られてゐるのは、蒼海自筆の歌稿で、他の箇所にも激越
な辞句を訂正した箇所があるから、蒼海自身が抹殺したのか、あるい
は御遺族が切り取つたのか、わからない。何しろ、明治十二、三年の
作が、昭和四十年頃蒼海研究者の目に触れることになつたので、その

間の経緯もよくわからないのである。蒼海には『蒼海全集』があるが、これは漢詩文の全集で、書簡なども集められてゐないやうだし、もちろんこの『歌稿』も載つてゐない。同郷の親友江藤新平は鼻首され、いままた西郷の「討死」の様子を知り、その遺言を知つたと思はれる蒼海の胸中は、ただならぬものにあつたことが想像される。しかも身は侍講といふ天皇側近の臣といふ要職に縛られて、言ひたいことも言へぬといふ境涯にあつたのである。南洲の遺言も二十年後に発表されてゐる。抹殺した二首は、一旦は書いてみたものの、思ひ余つて削除したのかも知れない。結局、この『歌稿』を蒼海は発表しなかつた。爾来、和歌は作らずに、漢詩文一辺倒になるのである。

第五首目の「一杯の水もてまつる。」普通はお酒をあげて祭るのだらうとおもふ。蒼海は一種の神道家だから、夭折した子をとむらふのにも神式をもつてして、「種臣が。まつる御け御き。見したまふらし」と詠んでゐる。南洲をまつるのに「一杯の水もてまつる」とは、どういふ意味なのか。賊名を帯びたことをもつて、神としないのであらうか。あるいは国家的の規模をもつて祭らるべき人物であるのに、それが行はれないことに対する己が無力を省みての言葉なのだらうか。いづれにしろ、「淡しとや見る」は、南洲に対して冷淡と見るだらうか、いや苦衷は察してくれるにちがひない、といふ意味になると思ふ。(深痛な悲しみのこもつたこの歌をいまの学生に見せると、幾人かはきまつて、「酌をしてくれた女の気持が薄情である」と解する。「汝」といふ字に「女」があり、そのうへ「酌」といふ字があるので、すぐホステスか何かを連想するらしい。エロ映画漫画の影響で、ほとほとまゐつてしまふ。悲話休題。)西郷の死とその遺言とは、蒼海のその後の生涯について離れなかつたにちがひない。この五首の(実際には七首の)和歌がこれを証する。蒼海は明治三十八年一月三十一日、元日の旅順陥落をことほぐ「乙巳元旦」の詩を最後として、七十八歳の生涯を閉ぢた。西郷の死後二十八年である。

天皇覽賀御楓宸。

万戸旗竿昇旭新。

此日敵人納降至。

由来元旦是佳辰。⁽⁷⁾

「此の日敵人降を納れて至る」の一句を、蒼海は南洲に告げたかつたであらう。

右のやうな、南洲の遺言をめぐる南洲と蒼海との関係はあまり知られてゐないと思ふが、『南洲遺訓』の序文を蒼海が書いてゐることは周知のことである。

『南洲遺訓』は、もともと庄内藩の酒井忠篤以下が明治初年に南洲の教へを受けてその談話を編纂したものであるが、南洲の死後公刊するに際して、蒼海に序文を求めたといふことは、やはり南洲と蒼海との親交——同志的關係によるものと思はれる。(蒼海の序文によると、この公刊を企てたのは、後に『蒼海閑話』を編集・発行した片淵琢その人である。)

蒼海は『南洲遺訓』の序文に次のやうに書いてゐる。

「南洲翁遺訓一卷、区々たる小冊子と雖ども、今の時に当り、故大将の威容の儼と声音の洪とを觀るに足る有るもの、独り此の篇の存するに頼れり。噫、西郷兄、何ぞ以て蚤く死せるや。⁽⁸⁾」

「噫、西郷兄、何ぞ以て蚤く死せるや」は、「慎しみて死すること勿れ」との遺言に対する蒼海の返答であつたらう。

さて、南洲と蒼海とを結んでゐるた國際的関心が、一口で言ふと對露問題であつたことは既に述べたところであるが、その道を直進して、明治二十二年、日本人未踏の伊犁地区に向つて消息を絶つた浦敬一(三十歳)は、云はば南洲と蒼海との弟子だつたのである。⁽⁹⁾

そして、東京帝国大学古典科の卒業論文として『大日本商業史』を書きあげて、浦敬一と同じやうに明治二十二年フィリピンに渡り、マニラの客舎に逝いた菅沼貞風（二十五歳）もまた蒼海の弟子であつた。蒼海は『大日本商業史』に序文を書いてその死を痛惜してゐる。⁽¹⁰⁾

浦敬一は平戸の人であるが、南洲の私学校を慕つて鹿児島遊学を熱望したが四囲の事情はこれを許さなかつたといふ。後、東京に遊学して蒼海の門に入りし、明治十七年朝鮮京城の変が起つた時、同郷の後輩菅沼貞風ら数名と蒼海の門を叩いたといふ。南洲の死後、南洲に寄せた敬慕の情を彼らが蒼海に寄せたのであらう。彼らをつないでゐたものは、強い献身憂国の道義感情であり、一の詩魂であつたことを、彼らの詩文が語つてゐる。残念ながら、彼らの思想は、浦敬一や菅沼貞風の夭折に見られるやうに、事業の上に結実しなかつたし、時代の表面に立つて華々しく人の心を導くことはできなかつたが、時あつて人々の心に点火してその心を燃え立たす地熱のやうに消えることはなかつた。

そのひとつ。『大西郷全伝』（全五巻、昭和二十一年）を書いた雑賀博愛（昭和二十一年没、五十七歳）は、菅沼貞風と一緒にフィリピンに渡航した福本日南の弟子であり、同時に、正岡子規の愛弟子であつた赤木格堂の弟子である。雑賀博愛すなはち鹿野山人に嗣子千尋氏編の遺歌集『鹿野歌稿』（昭和三十八年、騰写刷）がある。西郷・副島の思想と学問との系譜につらなるしきしまの道の歌人といふことができよう。

ちなみに、南洲も蒼海とともにフルベッキのもとで英語の勉強をしたらしい。最近見せてもらつた写真に、長崎・英語塾のフルベッキを中心に撮つた幕末時代の写真二葉があつて、それを見ると次のやうな人々がつつてゐる。⁽¹¹⁾

○西郷従道、林省三、副島種臣、江藤新平、フルベッキ師、松田雅典、大隈重信、西郷隆盛（三十三歳）、後藤象二郎。
○右の他に、大久保利通、小松帶刀、村田晉八、伊藤博文、勝海舟、坂本竜馬、横井小楠、ウイリアム・フルベッキ、岩倉具経、岩倉具定、中岡慎太郎、桂小五郎、大村益次郎、その他。

副島・江藤・大隈三人がフルベッキの門下の俊秀であることは知つてゐたが、この仲間の中に西郷がゐるのには驚いた。もつとも、大久保も桂（木戸）も伊藤も大村もゐるのだから、維新の立役者が一同に集まつたものであらう。

西郷と蒼海との関係だけを示すものではないが、参考のために一言した。

注

(1) 『蒼海全集』（大正六年二月二十八日、副島道正編集兼発行、全六卷）巻五、四〇丁表。

南洲

国家多難憶南洲。北黎風雲終古愁。李郭嘗明一王義。陳蕃定為本朝謀。遺憂天上悲君志。置重人間慕若儔。拙子如今真碌碌。徒為不死但搔頭。南洲未死二日。遺岡部實言乎。日。慎勿死。此事距今二十一年。

(2) 『副島蒼海閑話』（明治三十一年三月六日、片淵琢編集兼発行）

(3) 『蒼海全集』巻一、二丁。「客中示人二首」のうち「昔日欽差頭等臣。今年單旅歷游身。」

(4) 『蒼海歌稿』（仮称）。蒼海自筆の遺歌集。これについては、『師と友』昭和四十一年二月号・三月号所載、拙論「副島蒼海の和歌」（拙著『詩と政治』四六ページ以下に所載）に詳説した。

(5) 拙著『詩と政治』（昭和四十九年三月初版、南窓社発行）六五ページ。

(6) 『明治天皇御年譜』（藤井貞文博士編集、明治神宮発行、昭和三十八年七月）等に拠る。

(7) 『蒼海全集』巻六、五三丁裏。

(8) 『蒼海全集』巻六、二四丁。

南洲翁遺訓一卷。雖区区小冊子乎。当今之時。有足觀于故大將之威容之儼。与声音之洪者。独頼此篇之存。噫。西郷兄。何
以蚤死乎。(以下略)

(9) 拙著『詩と政治』の「明治の志士・浦敬一の詩魂」(八一〜八六ページ)参照。

(10) 『蒼海全集』卷六、一九丁裏、「大日本商業史序」

(11) 『青年新聞』第二二八号(昭和五十三年七月一日)